

入選

テーマ…医療と福祉、わたしの体験
「夢」

青森県立青森高等学校2年 渡邊 咲季

この夏、私は夢ができた。それはキラキラと輝いていて、今の自分には程遠い夢。だけど、絶対にかねえたい夢。そんな夢に私は出会った。今年の夏、私はグローバルサイエンスキャンパスの事業の一環である、福井大学医学部でのプログラムに参加した。将来は医師になりたいと考えてはいたが、どんな医師になりたいか分からず、ぼんやりとした夢しか持てなかった。そんな自分を変えたくて思い切って応募した。

青森市と福井市の距離は直線にして約660km。飛行機を2回、片道4時間半かけて移動する。それが毎週続いたので、もはや自分は福井市に住んでいるのではないかと思う程である。学校の授業と並行して行ったので、体力的にも精神的にもつらい時もあった。しかし、そんなことはどうでもよくなるほど、福井大学での活動は充実しており、とても楽しかった。

福井大学での活動は主に講義と実習だ。午前中は医学のさまざまな分野の講義を受け、午後の実習を行う。講義では専門的で高度な内容を学ぶことができ、実習では、実際の内臓や骨を触ったり、マウスに麻酔をかけたりした。どれも普段は絶対に経験することのできない貴重な経験で、とてもわくわくした。また、神戸の理化学研究所での研修では、実際に最先端の研究を目の当たりにし、自分の世界が広がった。

この活動を通して学んだことは、医師は患者さんの病気を治すことだけが仕事ではないということだ。医師は社会をより良くしていく責任があるのだ。そして、病院で患者さんを待っているだけの「受けの医療」ではなく、自ら社会に出ていき貢献する「攻めの医療」がこれから重要になるのだ。私は「攻めの医療」で社会に貢献できる医師、救急科専門医になりたい。患者さんが社会復帰できるよう、ともに一

分一秒を闘っていききたい。

そう思っていた矢先の9月5日、私の人生を大きく変える出来事が起こった。いつも通り母の車で登校していたとき、対向車線から車がよろよろと走ってきた。その運転手はけいれんして白目をむき、口から泡を吹いていたのだ。私と母はすぐに車から降り、母がAEDを持って来るよう叫び始めた。その間私は心肺蘇生を行った。すると近くのスーパーの店員の方がAEDを持って来てくれ、私はAEDを使った。まもなくその方は病院に搬送された。後から、その方は3日後に退院されたと聞いた。

まさか自分が人を助けるなんて想像もしなかった。最初に発見した時は怖くて体が動かなかった。しかし、それでも心肺蘇生とAEDを行えたのは、福井大学での経験と救急科専門医になりたいという夢があったからだ。心肺蘇生を行っているとき、その方が私の手を握ってきたことが忘れられない。人を助けるって、医師ってこういうことなのだと思身で感じた。命を助けるということは、その人の未来をつなぐことだと思ふ。私もそんな存在になりたいと強く思った。

今年の夏、私は沢山の貴重な経験ができた。それらの経験を通して、自分の将来と向き合うことができた。そして、夢ができた。この高校2年生の夏を、私は絶対に忘れない。これからは、受験などつらいことが沢山あるだろう。そんな時は、私の夢を思い出して頑張っていきたい。そして、救急科専門医としてより多くの人の命を救っていききたい。